

新しい住宅に向けて

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授
千葉 学

目次

固有性と普遍性	6
空間とプログラム	6
東京ハウス	7
ルール	8
身体的空間	9
新しい住宅開発	10

固有性と普遍性

建築は、本来一回性のものである。必ず特定の敷地で計画され、また特定のクライアントのための固有のプログラムのもとに計画される。住宅一つとってみても、大きな敷地もあれば小さな敷地もある。密集した住宅地で計画することもあれば、広大な自然を相手にする場合もある。住まい手も、大家族の場合もあれば、夫婦のこともある。そして同じ夫婦二人でも、生活スタイルは千差万別で、クライアントの数だけ多様な生活が展開している。そのような前提のもとに計画が始まる。それが建築の面白さでもある。逆な言い方をすれば、こうした固有性を最大限に生かすこと、建築的な言い方をすれば、プログラムとコンテキストを最大限尊重することは、建築の最も基本的な前提なのである。

しかしその一方で、いつも建築の設計をしながら、どこかこうしたプログラムとかコンテキストとかを超えた、原型的で普遍的な強さをもった建築を作ってみたいという衝動が消えないのもまた事実である。何か空間そのものが色褪せることなく存続するような、空間そのものに価値があるような建築を作りたい、そういった思いである。ギリシャの神殿が、プログラム上の役割を終えてもお人々を魅了してやまないように、ゴシックの教会が国を超えて作られ続け、そして今なお人々の心を動かしているように、そんな普遍的な形式を見つきたいと思うのである。

この2つのこと、つまり極めて個別的であることと、その対局の普遍的であることを同時に実現しようとするのは、理屈の上では矛盾している。しかし建築は、そんな理屈を超えてある瞬間、この2つの方向性がむしろ魅力的な邂逅を遂げてしまうことを形として、空間として見せてくれるのである。そして実はこのことが、建築の設計をしていて最も神秘的であり、また興奮する瞬間なのでもある。

今回のプロジェクトは、住宅のプロトタイプを開発しようというものである。今現在において普遍的でありえる住宅の原型を見いだそうとするものである。だがもちろん、そのプロトタイプという言葉に込められた思いは、どこにでも通用するものをたくさん作ろうということでもなく、また最大公約数的なものを見つけようとするのでもない。むしろ住宅にまつわる今日的な背景や生活の変化をより緻密に汲み取りながら、そこから何か普遍的な形式を見つけることができないか、ということなのである。

空間とプログラム

ところでプログラムとは、そもそもどういうものなのか。通常僕たちは、建物を用途によって区別したりしている。たとえば美術館とか学校とか、あるいは住宅というように。そして設計にあたっては、例えば美術館ならどんな展示物のためのどんな部屋が必要であるとか、学校であれば、どんな教育に基づいたどんな空間が必要か、住宅においても同じように、例えば家族構成に応じて子供部屋や寝室がいくつ必要か、といったことを組み立てて設計にとりかかる。このような用途から部屋の構成までも含めたことが、通常プログラムと呼ばれている。そしてこのプログラムが建築における前提であると、長いこと認識されてきた。そのこと自体、決して間違いではない。しかし、ここで言うような意味でのプログラムは、実はそう頼りになるものではないこともまた事実である。例えば有名な東京の原美術館は、もと

もと住宅であったところが美術館として使われているし、取り壊された表参道の同潤会の集合住宅も、最後はほとんどが商業施設であった。たまたま震災で、一時的に公民館に移っていた小学生は、生き生きとしていたし、倉庫に少し手を加えて快適に生活している人を、僕たちはたくさん知っている。

つまり、このような状況が示していることは、プログラムといって前提にされてきたことと空間とは、そもそも一対一対応などしないということなのである。プログラムに対し空間は、はるかに冗長なのだ。実際住宅に起きていることを考えてみても、子供が大人になって巣立っていったり、あるいは年をとった両親を引き受けることになったり、夫婦でさえも、家庭内別居なんて珍しくない。そしてこのようなプログラムの変化は、数年、あるいは時に毎年のように起こりうることであるから、建築の寿命に比べたら、遥かに短いサイクルなのだ。だから、子供が2人の4人家族なら、個室が3つにLDK、といった前提は、もう卒業しなくてはならない。これまで慣習的に、盲目的に前提とされてきたこのプログラムは、今ここで改めて再解釈されなくてはならないし、プログラムを超えた空間の抛り所を、極めて創造的に発見していかななくてはならないのだ。

東京ハウス

このような空間とプログラムの関係、あるいは建築における普遍性を強く意識するようになったきっかけとして、「東京ハウス」という、住宅のプロトタイプの開発を行ったプロジェクトがある。これは、コム・デザインの岡崎泰之さんの呼びかけで始まったものだが、その最大の特徴は、敷地の形状特性からプロトタイプを導くという点にある。つまり、それまでのプロトタイプが、たとえば中庭のある家、とか、モダンスタイルの家、というように、すべてが建築単体のみで成り立ちうるテーマに基づいたものであったのに対し、まさに正反対のアプローチである。というのも、それまでのプロトタイプは、いざ現実の敷地に当てはめると、様々な敷地条件によって途端に変形が繰り返され、結果的に全く別物になってしまうといった事態に陥ることが多く、特に東京のような狭小敷地が多い場所ではなおさら、敷地条件が、建築単体の論理以上により大きな影響力を持つ。そこに着目したわけである。

このような企画の背景には、住宅建築をとりまくいくつかの状況の変化がある。一つには、住空間への意識の高まりとともに、建築家への設計の依頼が増える一方、いやむしろそのような動きと並行して、もう少し簡便に、建築家の設計した家に住みたい、つまり長い期間建築家とのディスカッションを経て作り上げて行くといったプロセスではなく、例えて言うなら、オートクチュールは欲しくないが、プレタポルテは着てみたい、そんな感覚で、より簡便に家を手に入れたいと考えている施主が増えたことである。

もう一つには、住宅が、何か車の次に大きな環境であるかのごとく、手にいれようとする人が増えていることがある。かつてのように、生涯かけてのローンを組んで、例え職場から遠くても、とにかく3LDKを、といった感覚ではなく、むしろ自分たちの今の生活に最もフィットする場所に、小さくても拠点を作ろうとする、そんな意識に近い。このような背景のもとに、小さくても良質な住宅をたくさん供給する、それがこの企画の狙いである。

数々の土地情報を分析した結果、東京における30坪前後の土地を大きく「うなぎの寝床」、「旗竿敷地」、「角地」に類型化し、それぞれの敷地に3人の建築家がプロトタイプを提案した。



東京ハウス

ルール

僕たちが相手にした「うなぎの寝床」での提案は、極めて単純なルールによってできている。つまり、2つの大きな家具くらいの大きさの箱を、敷地で最大限確保できるボリュームの中に、断面方向において互い違いに配置する、というものである。一方の箱には寝室が、もう一方の箱には水回り空間が入って、残った余白の空間は、そこに住まう人が自由に考えていけばいいと考えたのである。このような案に至ったのは、一つには、住宅のプログラムを部屋の集合としてではなく、生活に最低限必要な空間とそれ以外の場所と捉え直し、それぞれに対して空間を与えようとしたのである。つまり、水回り空間と寝る場所さえ用意すれば住宅として成り立つと考え、そのための空間の配置を、「うなぎの寝床」に特徴的な敷地の奥行き感を最大限に生かすように考えたのである。

しかもこの単純なルールは、より柔軟に敷地条件を吸収できるとも考えた。というのも、いくら敷地から考えたとはいえ、プロトタイプもやはり一つ一つ違った場所で計画される。大きさもプロポーションも方位も、それぞれ微妙に違う。そんな中で、この単純なルールなら、多少この箱の配置がずれたり重なったり、あるいは伸びたり縮んだりしても、この空間の質は変わることがないのではないかと、ルールでありながら、それは決してリジッドな規則ではなく、むしろこうした敷地の不確定要素を柔軟に許容するしなやかさを備えているのではないかと、そう考えたのである。そしてこのしなやかな強さこそが、建築のプロトタイプにとって、さらには建築の普遍性にとって、最も本質的なことなのではないかと考えたのだ。



東京ハウス

身体的空間

ところでこの2つの箱の設定は、もともとは、水回りと寝室というように、プログラムから組み立てられた。それはもちろん空間の質も同時に示唆していた。つまり、箱の中はよりプライベートで閉鎖的な空間で、それ以外の余白の空間は、よりパブリックでなるべく周辺環境と密接に結びついた空間という具合に。しかしこのプロトタイプがいくつか実現していく過程では、実はプログラムと空間との関係は、融通無碍に展開してしまっている。台所が箱の外に出てしまったり、箱の中に趣味の部屋が入ってきたりというように、いわば当初の空間の設定とプログラムとのずれが、すでに第一作目から起こり始めたのだ。もちろんその判断は、個別の計画においてなされてきたのだが、この事実は、ルールのしなやかさが空間の使い方にまで及んでいると見ることもできなくはないが、むしろそこには、プログラムを超えた人間の身体と空間との関わりあいの本質が結果的に投影されていると見ることもできるのではないかと。つまり、この2つの箱と余白の空間が示唆しているものは、人間のきわめて動物的な身体からの欲求の表れなのではないか。言い換えると、一方で巣のような場所にこもりたいといった胎内回帰的な欲求と、その一方で、どこかその巣から離れてより外界と密接に関わってみたいといった社会的欲求、とでも言ったらいいだろうか。この2つの人間の本能的な空間への欲求に対応した空間がそこには生み出されていると見ることもできるのである。だからこそ、同じ空間の形式でありながら、それぞれの住まい手が、思い思いにその空間における行為を想像し、生活を組み立てていくことができるのではないかと。それはちょうど人間が、たとえばちょっとした地形的窪みを利用して食事の場所を作ったり、あるいは木の下で集まったり、というようにして空間を発見していつている状態に近い。



東京ハウス

新しい住宅開発

今回の開発において、大きくは2つのプロトタイプが提案されている。一つはjust house、もう一つはadjust houseである。前者は、単身者を想定した住宅であり、後者はもう少し大きな家族、しかもその家族が時間とともに変化していくことを想定して提案したものである。これはもちろん、東新住建 経営研究所による詳細なマーケティングの結果導かれた一つの前提を根拠にしているのだが、図らずも、この2つの設定は、先の住宅における身体的側面を考える上で、実に興味深い設定にもなり得ている。つまり単身者の住宅は、一人の人間が、自分のための器としてどんな空間を欲するか、という設定に、そして家族のための住宅は、何人かの人間が集まるときに、どのような集まり方を欲するか、という設定である。

例えばjust houseにおいては、東京ハウスと同様に、極めてパーソナルでプライベートな胎内回帰的空間と、より大きく外界に向かって開かれた空間という2つを同時に獲得しようとするものであるし、また一方のadjust houseにおいては、何人かの人間が集まりながら、同時に一人でもいられるといった、人間の集団形成の根源的な欲求が、空間に翻訳されている。それぞれの人間が相互にいかなる距離を築くのか、その関係性がデザインされている。

いずれの案においても、それらはプログラムから導かれながらも、どこかそれがプログラムとは無縁の、人間のより身体的な側面に着目したかのような空間の形式を導く結果になっているのは興味深い。しかしもしかしたらこのことこそが、プロトタイプか否かを超えて、住宅がこれから考えていかななくてはならない最も大切な切り口になっているようにも思うのである。

以上